

早稲田大学博士論文(概要)		
2008	学位記	文科省報告
	4989	甲 2770

論文概要書

近現代の漢語副用語の機能に関する研究

趙 英 姫

論文概要書

近現代の漢語副用語の機能に関する研究

趙 英 姫

近代以降、日本語における漢語の研究分野は大きく三つに分けられる。第一、本来中国語である漢語の日本語への流入に関する研究で、漢語の出自の研究、漢語の翻訳語の研究、和製漢語の研究などがこれに含まれる。第二、造語論の観点にたった字音語基の造語機能についての研究がある。第三、一つの分野にはまとめられにくい、個々の漢語の意味・用法に関する研究がある。これらの漢語研究はそれぞれの分野で研究成果をあげてきた。ところが、漢語を日本語の構文要素として認識し、構文要素としての漢語の性格について論じたり、漢語の構文要素が和語の構文要素とともに日本語に占める位置などを問題にする研究はあまり盛んではなかった。

日本語の歴史を振り返ると、本来和語で充分まかなわれていたところに、漢語の構文要素はそれなりの位置を占め、和語と同等の資格で使われているといえる。本論文は、日本語の構文要素としての漢語の性格を明らかにしたいという問題意識から出発している。漢語は文中でさまざまな構文要素となるが、本論文では構文要素としての機能の特徴をとらえやすいという理由で、文中で和語の助辞がついて（和語の助辞がつかない場合も含め）副用語として機能するものを考察対象とする。近代以前の状況についての考察も必要であるが、ここでは現代語の基盤が形成された明治の言文一致期以降、現代に至るまでの近現代における漢語副用語の性格を明らかにすることを考察の目的とする。

次に、本論文の方法論について述べておきたい。本論文では、近現代の漢語副用語を明らかにするための考察方法として、明治の言文一致期から明治末期までの近現代語形成期から、1960年代から1980年代ごろの近現代語完成期までの漢語副用語の変遷について、文中の出現形態を中心に近現代の日本語の漢語副用語の性格および漢語副用語が日本語に占める位置を明らかにすることを目的とする。なお、本論文では、明治期から昭和期に至る、東京語を中核とした近代語から現代語への流れを「近現代語」としてひとまとまりのものと捉え、その始めと終わりのそれぞれ約20-30年を「形成期」「完成期」と呼び、その期の副用語の実態を比較することにする。近現代語全体の姿を明らかにするためには、全期間にわたって調査を行うことが必要だが、長期にわたり資料の等質性を保つことには困難がある。むしろ、それぞれの時期の特徴を抽出して比較することにより、問題の所在を明確にすることが有効だと考える。

本論文の考察対象となる漢語副用語とは、正確には語基の部分に1単位以上の字音形態素を含み、単独または和語の助辞が結合した形で文のなかで連用修飾的成分とな

るものを指す。なお、副用語の範囲を広く考え、一般には形容動詞の連用形とされるものや時間副詞、数量副詞も考察対象に入れた。狭義の副詞には入らない形容動詞の連用形などを含む広い捉え方をするために、「副詞」とせず「副用語」という用語を使っている。また、本論文では、先行研究にならない語を構成する単位としての漢語を形態素レベルで考えるのが有効だとみる立場に立ち、語基と助辞という用語を使っている。語基とは、語の意味の中核となる形態素を意味し、助辞とは、語基と結合して語基を文の成分として機能させる形態素のことである。これらの用語は先行研究の定義に準じて使われている。

近現代の漢語副用語の使用実態を明らかにするために、形成期と完成期の両時期の各ジャンルの作品から漢語副用語を採集した。両時期の漢語副用語の比較は主に小説作品が中心となるが、各ジャンルの文体による漢語副用語の比較も考察対象となるので、小説に限らずほかのジャンルからも漢語副用語を収集し、ジャンル間の比較をした。またいろんなジャンルから収集した漢語副用語データを一つにすることによって、一つのジャンルだけを扱うことによって生じる問題点を少しでも減らし、その一つにしたデータをもって、近現代語形成期と近現代語完成期の漢語副用語を代表させる意味もある。ただし、中心になるのは小説作品であり、小説以外のものはジャンルによって収集した用例数はそれぞれ異なる。なお、小説作品のなかで『金色夜叉』は口語体の会話文だけを対象とした。

近現代語形成期の資料は言文一致以降明治末期までの作品から漢語副用語のデータを収集したが、啓蒙書については言文一致期以前の俗文体のものを含み、談話体で書かれた小新聞も含む。

「第1章－1．形成期の漢語副用語の量的概観」では、形成期の教科書、啓蒙書、小新聞、小説、雑誌から漢語副用語の用例を採集したものを集計し、共出現率を調べた結果、形成期のジャンル間の類似性は低い結果が得られた。

各ジャンルの採集データを一つにした形成期のデータの集計結果は延べ語数8542、異なり語数859、異なり語基数777である。形成期のデータの延べ語数の分布を調べた結果、異なり語数の約11%に当たる100の漢語副用語が全延べ語数の約74%を占めていて使用頻度が高いことが明らかになった。漢語副用語を構成する字音語基の構成単位数は2単位のものが全体の約76%を占め、もっとも多い。3単位以上のものには最終次結合に接辞性字音形態を含むものが多い。

「第1章－2. 完成期の漢語副用語の量的概観」では、完成期のシナリオ、小説、随筆、新聞から漢語副用語の用例を採集したものを集計し、共出現率を調べた。形成期と同様ジャンル間の類似性は低い結果が得られた。

各ジャンルの採集データを一つにした完成期のデータは、延べ語数9883、異なり語数991、異なり語基数920である。延べ語数の分布では、完成期のデータの異なり語数の約14%程度のものが全延べ語数の約74%を占めていて、使用頻度が高いことがわかる。漢語副用語を構成する字音語基の構成単位数は形成期と同様、完成期でも2単位のものをもっとも多い。また、3単位以上の語基には最終次結合に接辞性字音形態を含むものが多い。

「第1章－3. 近現代の漢語副用語の量的比較」では、形成期と完成期のデータの集計を比較した。共出現率の比較では、完成期のジャンル間の類似性が形成期よりやや高い傾向がみられた。延べ語数の分布の比較では、各区間における異なり語数の百分比と延べ語数の累計の百分比ともにほとんど変わらない結果が得られた。語基の構成単位数の比較では、両時期ともに2単位のものをもっとも多いことは共通しているが、完成期のほうは形成期より2単位語の割合が少々減少し、3単位語の割合が高くなる傾向がみられた。その理由は、接辞性字音形態素を含む長い単位の語基が完成期に増えたからである。

両時期の出現頻度の高い延べ語数50位までのものの比較では、形成期は約65%のものが共通し、完成期は約54%のものが共通している。出現頻度の高い10位までの比較では、両時期ともに90%のものが共通していて、使用頻度の高い延べ語数10位までのものは両時期に安定的に使われていることがわかる。両時期の共通異なり語基数は381で形成期のデータの異なり語基の44.4%、完成期のデータの異なり語基の41.4%のものが共通している。共通異なり語数は407である。

「第2章－1. 漢語副用語の出現形態の分類」では、出現形態に注目し、漢語副用語を文中で和語の助辞を伴って出現する際の形態、つまり出現形態によって分類した。出現形態に注目する理由は、字音語基が文の単位である語となり、文の成分として機能する際、どういう和語の助辞を伴うか（和語の助辞を伴わない場合も含め）は、文中でどのような成分として機能するのか、つまりその漢語副用語の文中での修飾機能を示す標識のようなものと考えられるからである。

文中で漢語副用語を構成する字音語基は、文中で伴う助辞（助辞を伴わないのも含

め)、すなわち出現形態によって「ナ型」「二型」「ト型」「□型」「φ型」の5種の分類項目で分類される。分類の結果、形成期の出現形態別異なり語基数の百分比は、ナ型(42.5%)>φ型(35.5%)>ト型(16.2%)>二型(4.4%)>□型(1.4%)の順に高く、完成期はナ型(55.8%)>φ型(29.0%)>ト型(10.5%)>二型(3.7%)>□型(1.0%)の順に高い。延べ語数の百分比は形成期は、φ型(37.7%)>ナ型(35.5%)>二型(14.6%)>ト型(6.4%)>□型(5.8%)の順に高く、完成期はナ型(43.9%)>φ型(34.2%)>二型(12.8%)>ト型(5.2%)>□型(3.9%)の順に高い。

「第2章-2. 漢語副用語の出現形態別修飾機能の特徴」では、「1. 漢語副用語の出現形態の分類」で行った文中で漢語副用語を構成する字音語基の出現形態の分析結果に基づいて、各出現形態の主な修飾機能について考察した。また、字音語基による連体用法の修飾機能についても簡単に触れた。ナ型の連体用法は、被修飾語の名詞の実体概念に内在する性質の一面を修飾するものであり、ナ型の連体用法によって被修飾語の概念はより具体化され、限定される。一方の助辞ノがつく連体用法は、修飾対象に内在する側面とは無関係であり、被修飾語の外側の話者の判断を示すものであるという修飾機能上の違いがある。

ほかの助辞がつかずもっぱら助辞ノがついて連体成分となる〈ノ〉類は、被修飾語との結びつきが固定的で、慣用的に使われる傾向がある。

漢語副用語の出現形態別に次のような修飾機能上の特徴が指摘される。ナ型の漢語副用語の修飾機能は、述語を修飾・限定する点では従来の様態の副用語と似ているが、様態の副用語が動きに内属する諸側面を修飾し、動きに具体性を与えるものである反面、ナ型の漢語副用語は、〈動作主体の心的態度〉と〈動作の内容面への評価〉といった、抽象的な側面を修飾・限定するものであるという特徴がある。

二型の漢語副用語の修飾機能の特徴は、事態の〈時間的様相〉を表すものが多く含まれていることである。二型の〈時間的様相〉のものはさらに、「一時に」「次第に」のように動きの時間的な進行様子を修飾する事態の〈時間的進行の様子〉を表すものと、「直に」「不意に」のような事態が発生するまでの時間量を限定する〈事態発生までの時間量〉を表すものに下位分類される。

二型の漢語副用語はナ型が述語が文法的要素に分化する以前の、述語の語彙的概念を修飾・限定するものである反面、二型にはナ型がはたらく層より外側のヴォイス、アスペクトの層ではたらくものが多く含まれている。

ト型の多くは、歴史的にタリ活用起源のもので、動作が行われる際のありさまを具体的に修飾する様態の副用語である。特に、ト型には動きのありさまを感覚的に修飾するものが多く、擬音語・擬態語的なものといえる。

□型には、述部の否定の要素と共起したり、あるいわ話者の主観的な態度を表す陳述の副用語が多く含まれている。

φ型には、陳述の副用語が多く含まれており、ほかの出現形態とははっきりと区別される。陳述の副用語のほか、φ型には事柄を取り巻く状況を示す〈時〉〈場所〉を表すもの、また事柄内の修飾成分である〈程度〉〈量〉のものも多い。ところが、ナ型とト型に多い動作の抽象的な側面を限定したり、動作に具体性を与えるような修飾機能のものはみられない。

「第3章－1. 文の重層的構造と漢語副用語の現れ方」では、漢語副用語を述語との修飾関係によって、意味・用法別に分類し、文の重層的な構造における現れ方をみた。文の重層的な構造に関する研究にはいろいろな先行研究があるが、そのなかでも南不二男の描叙、判断、提出、表出の四つの段階における漢語副用語の現れ方を調べた。この考察は、「第3章－2. 文の重層的構造と関連付けた漢語副用語の分類」で文の重層的な構造と関連付けながら漢語副用語を修飾機能によって分類し、出現形態と修飾機能との関係を明らかにするための前段階のものとして位置づけられる。南不二男の描叙、判断、提出、表出の四つの段階における漢語副用語の現れ方は以下にまとめられる。

- ・ 描叙の段階に現れるもの
 - 〈様態〉 〈動作主体の心的態度〉 〈動作の内容面への評価〉 〈程度〉
 - 〈量〉 〈時間的進行の様子〉
- ・ 判断の段階に現れるもの
 - 〈事態発生までの時間量〉 〈事態継続の時間的長さ〉 〈蓋然性〉 〈側面〉
 - 〈時〉 〈場所〉 〈頻度〉 〈陳述〉
- ・ 提出の段階に現れるもの
 - 〈陳述〉
- ・ 表出の段階に現れるもの
 - 〈陳述〉

「第3章－2. 文の重層的構造と関連付けた漢語副用語の分類」では、「第3章－

1. 文の重層的構造と漢語副用語の現れ方」で考察した文の重層的な段階に現れる漢語副用語の出現形態別意味・用法の分類結果に基づいて、修飾機能による漢語副用語の分類を試みた。

漢語副用語は文の重層的構造のどの層ではたらくかによって、〈事柄の副用語〉〈状況の副用語〉〈陳述の副用語〉の三つに分類される。漢語副用語を三つに分類した際、そこに含まれる漢語副用語の出現形態の傾向から、事柄的な性格のものから陳述的な性格が強くなるにつれてφ型の出現が多くなることが指摘される。このことから、出現形態と修飾機能との関係は次のように考えられる。字音語基に助辞がついて副用語としてはたらく際、その出現形態は（助辞がつかない場合も含め）字音語基が述語をどのように修飾するかを示す標識のようなものといえる。すなわち、直接述語の用言を修飾する〈事柄の副用語〉には、漢語副用語と述語との修飾関係の緊密さを表す標識として助辞二、トを伴った出現形態のものが多く、直接述語にかからないで事柄全体、または命題全体にかかる〈状況の副用語〉〈陳述の副用語〉には助辞が脱落したφ型が多いのである。

同一の字音語基に複数の出現形態がある「自然（は）」「自然と」「自然に」の例を通じて出現形態と修飾機能との関係を検証した。中心的な用法からみて助辞二、トを伴う「自然と」「自然に」は〈事柄の副用語〉であり、助辞を伴わない「自然（は）」は前後するAとBの事柄の因果関係を示す〈状況の副用語〉である。ただし、実際の使用においては副用語の文体的な性格も影響している。

「第4章－1. 近現代の漢語副用語の出現形態の量的比較」では、形成期と完成期の漢語副用語を出現形態別に量的に比較し、近現代における漢語副用語の量的な変遷傾向を考察した。比較の結果、延べ語数、異なり語基数ともにナ型のものが増加する傾向が顕著である。それぞれの出現形態の異なり語基数を形成期にのみ出現するもの、両方の期に出現するもの、完成期にのみ出現するものに分けて集計した結果からも、完成期にナ型が増加する傾向が確認できた。近代から現代への漢語副用語の変遷の一つの傾向として、「○○に」のように副用語として用いられ、「○○だ」「○○な（の）」の形で叙述成分や連体修飾成分となるものが多いことが指摘される。

「第4章－2. ナ型の漢語副用語の増加」では、「第4章－1. 近現代の漢語副用語の出現形態の量的比較」で考察した両時期の出現形態別分類の量的変化にみられる傾向を手がかりに、質的な変化の一つとしてナ型の増加傾向について考察した。近現

代に増加したナ型には〈動作主体の心的態度〉と〈動作の内容面への評価〉を表すものが多い。ナ型は文体的に文章語的で、和語と比較すると物事を大規模に抽象的にとらえる表現であり、それがナ型の増加をもたらした要因として考えられる。

また、各ジャンルにおけるナ型の漢語副用語の使用状況を比較し、ナ型の文章語的な文体的性格が各ジャンルにどのように反映されているかを検証した。その結果、近現代にナ型の漢語副用語が増加した傾向が確認された。その傾向は特に新聞の文体に著しく、新聞と日常語的な表現の多い随筆との間には差がみられた（58.5%＞41.2%）。

「第4章－3. 話者の述べ方を表すゆ型の漢語副用語の使用の増加」では、近現代の漢語副用語の質的な変化の一つとして陳述の副用語の使用の増加について考察した。

近現代に使用が増加した陳述の副用語には話者の述べ方を表すものが多く、特に前後の句または文の論理関係を明確にすることによって、話者の判断内容の確実性を裏付けるはたらきをするものが多い。論理関係を明確にする言い方で、形成期ではなく完成期に新しくみられる言い方には接辞性字音形態素「的」を含む「一的には」の言い方がある。「一的には」は、これから述べようとする内容を最初に限定することによって、次に展開する叙述内容を予測可能にし、読み手に明確に提示するはたらきをする。ほかに完成期に新しい話者の述べ方を表す言い方として「正直にいうと（いって、いえば）」「端的にいえば」などがある。

「第5章－1. 形成期の小説における漢語副用語の出現形態と使用場面との関係」では、形成期の小説で漢語副用語が使われる場面に注目し、会話文にのみ出現するもの、会話文と地の文両方に出現するもの、地の文にのみ出現するものの三つの使用場面に分類・集計し、そこに出現する各出現形態の漢語副用語の文体的な性格の傾向を述べた。小説の使用場面に注目した理由は、小説の使用場面は、そこに出現する語の文体的な性格を知る手がかりとなると考えられるからである。すなわち、もっぱら会話文で使われるものは文体的に俗語的であり、もっぱら地の文にのみ使われるものは文章語的である。会話文と地の文両方に使われるものは日常語的といえる。

形成期の小説の漢語副用語を使用場面別に分類・集計した結果、異なり語数では文章語的なもの（地の文にのみ出現するもの）＞日常語的なもの（両方に出現するもの）＞俗語的なもの（会話文にのみ出現するもの）の順に多く、延べ語数では日常語的なもの（両方に出現するもの）＞文章語的なもの（地の文にのみ出現するもの）＞俗語的なもの（会話文にのみ出現するもの）の順に多かった。

出現形態別には、φ型は会話文にのみ出現するものと両方に出現するものに占める割合が相対的に多く、ナ型は地の文にのみ出現するものに占める割合が高い傾向がみられた。特に、ト型は約80%のものが地の文にのみ出現し、文章語的なものが多い傾向が顕著である。

会話文にのみ出現するものは出現語数そのものが多くないことも影響しているが、もっばらくだけた会話文にのみに使われる俗語といえるようなものはないといってよい。両方に出現するもののにはどの出現形態も、程度と陳述の漢語副用語が多い。その理由としては、地の文は主に客観的な事実の描写・説明に重きが置かれやすいため、程度と陳述のような話者の主観を表す要素は地の文より会話文に出現しやすいことが考えられる。会話文にのみ出現するものと両方に出現するものに、φ型の割合が相対的に高いのは、φ型に程度、陳述の副用語が多いからだと考えられる。地の文にのみ出現するものに、ナ型の割合が高いのはナ型に多い〈動作主体の心的態度〉〈動作の内容面への評価〉を表すものが物事を抽象的にとらえる文章語的な表現であり、会話文よりは地の文に向いているからだと考えられる。

「第5章－2．完成期の小説における漢語副用語の出現形態と使用場面との関係」では、完成期の小説の漢語副用語を使用場面によって分類・集計し、形成期の小説データと異なるところを指摘した。

完成期の小説の漢語副用語を出現形態別に使用場面によって分類・集計した結果は形成期の小説と大して変わらない。異なり語数は地の文にのみ出現するもの（文章語的なもの）＞両方に出現するもの（日常語的なもの）＞会話文にのみ出現するもの（俗語的なもの）の順に多く、延べ語数は両方に出現するもの（日常語的なもの）＞地の文にのみ出現するもの（文章語的なもの）＞会話文にのみ出現するもの（俗語的なもの）の順に多い。

出現形態別には、ナ型は地の文にのみ出現するものの割合が高く、文章語的なものが多い傾向がみられた。ト型は形成期と同様、約80%以上のものが地の文にのみ出現し、文章語的なものが多い傾向が形成期と同様著しい。φ型は、形成期には 会話文にのみ出現するものと両方に出現するものの割合が相対的に高い傾向がみられたが、完成期には地の文にのみ出現するものの割合が高くなり、変化がみられる。

「第5章－3．近現代の小説から見た漢語副用語の文体的性格と推移」では、「第5章－1．形成期の小説における漢語副用語の出現形態と使用場面との関係」と「第

5章－2. 完成期の小説における漢語副用語の出現形態と使用場面との関係」で述べた形成期と完成期の小説における漢語副用語の使用場面による出現傾向の違いを中心に考察することによって、近現代の小説を中心に漢語副用語の文体的性格の推移を述べた。

両時期の小説データの比較では、すべての使用場面においてナ型が増加し、ほかの出現形態は減少する傾向にある。どの使用場面でもナ型の割合がもっとも高いことは形成期と共通しているが、ナ型の増加によって、ナ型とφ型の割合の差は形成期よりひらく傾向にある。また、ナ型は物事を抽象的に、大規模にとらえる文章語的な表現で主に地の文にのみ出現する文章語的なものが増加する傾向がみられるが、一方で会話文に使われる日常語的なものも増えていることが指摘される。すなわち、近現代においてナ型の文体的な性格の変化の様子がうかがわれ、接辞性字音形態素「的」を含む語に特徴的に現れている。また、近現代における「一的には」の使用の増加は情報をより効率的に伝えようとする発想の表れであると考えられる。

以上に、本論文で考察した内容の概要を目次にしたがってまとめた。以下に、本研究で明らかになったことを簡略にまとめておく。

近代以降、日本語に漢語が増えたことはたびたび指摘されることである。漢語の増加は一般に語彙だけの問題として認識されやすいが、漢語は語彙だけでなく日本語全般に影響を与えてきた。また、近代以降日本語における漢語の増加はただ単に漢語がそこにあるから増えたのではなくそこには漢語の増加をもたらした背景が存在する。その背景とは複雑で一つにいうのは難しいが、その背景の一つに日本語を使う日本人の言葉の発想の変化があることは確かである。その日本語の使い手の発想がもっとも端的に表れやすいのが漢語副用語である。

近現代における漢語副用語の変遷傾向で著しいのはナ型の増加である。すなわち、近代から現代への漢語副用語の変遷の一つの傾向として、「○○に」のように副用語として用いられ、「○○だ」「○○な(の)」の形で叙述成分や連体修飾成分となるものが多いことが指摘される。ナ型は和語と比較すると物事を抽象的に、大規模にとらえる文章語的な表現である。近現代におけるナ型の増加は、日本人の発想が物事を抽象的に、大規模にとらえる発想をするようになったことを意味する。

もう一つ近現代における漢語副用語の変遷の特徴は、話者の述べ方を表す漢語副用語が増加したことである。話者の述べ方のなかでも、文の論理関係を明確にする「特

に」「当然」「結局」のようなものの使用の増加が指摘される。わかりやすくいうと、明治期には、「特に」を使って文中で強調したい部分を取り立てたり、あるいは「結局」を使って述べられたことの結論をまとめたりする表現はほとんど使われていなかったといえる。要するに、日本人は論理的に述べることを好み、そのために漢語副用語を使ってその工夫をして来たのである。

本稿では、近現代における漢語副用語の性格について考察を行ってきたが、漢語副用語の性格を明らかにするためには、和語の副用語との比較が欠かせない。今後、和語の副用語も考察対象に含め、本論文の結論を補強し、より明確にしていきたい。